しての史學(三)現實の告白(四)理想の時代(五)古典と復古日本精神(六)變轉期の六とし古事記及六國史より伊達自得の大勢三轉考に至る三十餘種の代表的史籍をあげて之を論じたが、著者は殊にそれらの原著者の史觀を見んとした。從つて史籍もこの立場から選擇され、これらの史料としての價値、表現の態度、原著者の生活せる時代とその影響と云ふものが深く顧みられてゐる。然し著者のこゝに使用まる史觀なる語は Geschichtsauffassung ではなく、むしろ原著者に於ける Historischer Sinn なる意味である。

本書を通讀して直ちに感ぜらるゝことは、著者が常に熱情ある筆致を以て論じてゐることであり、源氏物語に就ては、紫式部は歷史を以て生の流轉を表現すべきものと考へたし、かゝる態度の下に作られたる源氏は「生の表現としての歷史であり藝術であり」それは更に「詩であり現實性の歷史觀である」と論じたるが如き、又愚管抄に於ては著者年來の蘊蓄を傾けて、史的原理としての「道理」を鮮明したるが如き、或は山鹿素行の中朝事實の事實なる語にも注意したるなど讀者をして多大の興味を感ぜしめ、示唆を與ふるもの寔に尠しとしない。著者は又緒言に於て日本史學史研究の困難を述べ、本書は「史觀の綜合的發展を豫想しない乍らも、箇々の史籍を論ずる爲に原著者の思想と史觀とを絕えず念頭に於いて」論じたと云つてゐるが史觀の發展的考察にも努力したことは本書の諸所に窺ふことが出來、史籍解題としての本書に史學史的性質をもつものを與へて本書の價値を大ならしめた。

然し一面各史書を論ずる著者の自由なる筆致と、用語の概念の不明確が、あるわざはひをなせる事も見逃し得ない。一例をあぐれば上述の源氏物語論の如きは著者の歷史學に就ての見解には尙論議を要するものがあると考へられるが、更に史觀の考察と云ふ著者の態度からすれば本書の節の分け方にも、著者の新しく推薦せる史書に就ても今一應考へ直さるべきものがあるであらう。云はゞそれらの論述に於ける統一的なるもの、缺如が指摘さるべきである。けれども本書が箇々の論述に於て、極めて優れたるものを有してゐることはこれらの瑕疵をも補つて充分であり、隨所に示されたる著者の卓越せる見解に對して、筆者は深甚の敬意を表するものである。(前田一良)

大唐大慈恩寺三藏法師傳、同校異索引

東方文化學院京都研究所發行

普通慈恩傳として呼ばれて居る此の大唐大慈恩寺三藏法師傳の有する史料的價値の重大さは今更玆に云ふ迄もあるまい。其の唐の貞觀未慧立の撰ぜる前半五卷が、大唐西域記と共に單に、唐代に於ける西域印度の狀態、並に其等と唐との交通等に關する必要不可缺の文獻であるのみでなく、更に垂拱四年彦悰の次げる其後半五卷と共に、之又當時の譯經事業より廣く佛教並に其れに關連する一般社會狀勢を把握せんとする爲には必須缺くを得ざる史料たる事は斯界の齊しく認むる處であり、吾人が唐

代此等歷史地理的、宗教史的、社會史的或は民俗的研究等を爲すに當つても常に本傳の引用を怠ることを得ないものである。而も其際吾人が從來極めて不便を感じ不安に惱されて來たのは、現在の流本の總てが夥しき魯魚の誤を有した事であつた。一般に最も精確と目されて居る高麗藏本すらもなほ冒字を四月とする如き誤を往々に存し、而して古寫本の如きは勿論一般の利用を許される筈もなく、爲めに本傳校勘記の出現は學界多年の要望であつた。

本書は實に此の要望に副はんが爲めに、東方文化學院京都研究所が其古書複製校勘事業の一として發刊せられたるものに外ならぬ。卽ち本書發凡の冒頭にも「但ダ現今流布ノ本ハ魯魚ノ誤ヲ有スルコト甚ダ多ク、之ヲ舊抄古刻ニ校スルニ非ザレバ、直チニ依據スルニ足ラザルハ尤モ惜ムベシト爲ス、茲ニ於テ本研究所ハ從來知ラレタル此ノ書ノ善本數種ヲ蒐メ、就中高麗本ヲ以テ底本トシ、其他ノ各本ニ依リテ異同ヲ校勘シ、共ニ併セテ之ヲ出刊セリ、固ヨリ本書研究ノ資料ヲ學界ニ提供セントスル意ニ外ナラズ」と明記せられてゐる處である。

和裝、帙入、菊版の四册、中二册は高麗高宗三十二年なる乙巳彫造の歲次見ゆる高麗藏本を玻璃版縮刷して、以て底本に當てられたものであり、卷頭には尙奈良興福寺所藏延久古寫本以下校勘に用ひられたる古刻古寫本卷首の寫眞版九葉並に校刊發凡が載せられてゐる。他の二册は卽ち校異一册、索引一册である。校勘に用ひられたる古寫古刻本は、

奈良興福寺所藏延久古寫本、內藤虎次郎博士所藏大治古寫本、松本文三郎博士所藏承元古寫本、醍醐三寶院所藏崇寧刊本、京都知恩院所藏紹興刊本、黃檗山明刊本、京都知恩院所藏大唐三藏玄奘法師表啓古寫本零卷、小泉策太郎氏所藏沙門玄奘上表記寫本一卷

の九本に上り、此の諸本に依つて極めて嚴格に殆ど一點一劃の差異も一々之を擧げて居るのであるから、從來本書研究者の最も惱されたる魯魚の誤は之に依つて完全に一掃されたと云つても過言であるまい（校異一一〇枚）。索引は國音を以て五十音圖に排列せるものと、官話音を以てアルファベット順に排列せるとの二つの通りを具へ、各〻傳中に見ゆる固有名詞、地名人名書名年號、及び特に重要なと思はるゝ西域印度等に關する名辭を網羅せられて居るのであるから、極めて便利と云はねばならぬ（五十音圖の部二九枚、官話音アルファベット順の部二六枚）。（卽ち校勘、索引のシステムは先年京都帝大出刊の大唐西域記のそれと大體等しい譯である。）

要之、本書の出刊は學界多年の要望を滿せるものであり、今や東洋文化史、又宗教史社會史殊に西域史研究の益々旺盛ならんとする時に當つて、史家の本書活用の結果は大に期待すべきものがあるであらう。吾人は本書發刊を學界の爲に衷心慶賀すると共に、又本書を監修せられたる京都帝國大學敎授羽田亨博士、並に校勘、索引作製の任に當られた東方文化學院京都研究所囑託宇都宮清吉學士の勞を感謝するものである。（丸善株式會社、藁文堂發賣、價拾圓）（內田）